

〈2〉「幻の陸稲品種」エソジマモチ (江曾島糯) 復活と地域振興

栃木県立宇都宮白楊高等学校教頭 橋本 智

1 エソジマモチの由来

栃木県特産の農作物といえば、全国1位のイチゴ・カンピョウ・アサなどが有名であるが、「陸稲」(りくとう・おかぼ)は、栃木県は都道府県別収穫量が第2位(1位は茨城県)、上位2県で全国のおよそ半を占める、栃木の「隠れた特産農作物」である。令和元年(2019)産の陸稲作付面積・玄米収穫量は、農水省推計で全国702ヘクタール・1600トン、うち茨城県487ヘクタール・1170トン、栃木県179ヘクタール・378トンとなっている。同じく栃木県での水稻の5万9200ヘクタール・31万1400トンと比べると桁違いに少ないが、水田化できない畑地(台地)の貴重な作物として古くから広く栽培されてきた。

江戸時代、下野国の代表的な農書(農業技術書)で、宇都宮近郊の河内郡蒲生村(現:上三川町)の田村仁左衛門吉茂が天保12年(1841)に著した「農業自得(のうぎょうじとく)」にも、陸稲の栽培法が詳述されており、当時から重要な農作物だったことがわかる。

県内で栽培された陸稲の在来種のうちで、明治30年代から昭和20年代まで半世紀以上、最も長い間栽培された品種が「エソジマモチ」(江曾島糯)である。この品種は河内郡横川村大字江曾島(現:宇都宮市江曾島町)の農民、篠崎重五郎(しのざきじゅうごろう)によって育成された。彼は江戸時代の天保9年(1838)に横川村大字屋板(現:宇都宮市屋板町)に生まれ、江曾島の篠崎家の養子となり、陸稲栽培が農家に利益があることから種の選抜と試験栽培に努め、苦心



篠崎重五郎(1838～1906)

の末、「品質の良好にして光沢に精彩ある」優れた品種を作り出すことに成功した。その品種は「江曾島糯」と名付けられ、県内一円で栽培されるようになり、栃木県が陸稲産地として全国に知られる

ようになった基礎を築いた。

篠崎重五郎は明治39年(1906)に67歳で亡くなったが、彼の功績を記念して、明治43年(1910)に東京街道(旧国道4号線)沿いの一里に大きな「老農篠崎君功績碑」が建てられた(「老農」とは、農業技術に優れ地域の農業改良に功労のあった人物の尊称)。碑文には以下の通り刻まれている。

「最近、我が国では農事革新が急務であり、その新しい農法を唱える者がとても多い。しかし、これを実際に今やってみようとする、その説と違う結果に成ることが少なくない。これは理論にばかり固執して、実質まで探求しない過ちからである。その実質を明らかにし誤りを直していくことを長く行い、もち米作りで優れた成果を挙げたのが篠崎君で、彼ほど成果を挙げた者はあまり聞いたことがない。彼の名は重五郎、河内郡横川村江曾島の人で篤農家として有名であった。以前から、もち米農家は儲けが多いことを知っていて研究を始めた。水稻から種を選び出して、その質の良いもので試作を多年にわたり行い、ようやく良い種を収穫できるようになった。今や名声は地元近辺ばかりでなく県下全般に広まり、人呼んで江曾島糯という。この頃は、東京にまで販路が広がり世の人々は新しく優れたものを競って作っていて、一つ発明すれば賞賛され記録されるものであ

る。ましてや公益のために尽力した篠崎君の功績を後世に伝えないで、埋もれ消えさせてしまっはとても嘆かわしいことではないか。そこで心を同じくした者たちが相談して、碑を建てて彼の功績を記し後世の人に残すことにした。後の人がこれを見て彼の功績に思いをはせてもらいたいと願うばかりである。明治四十三年十月」（原漢文を意識）

昭和6年（1931）東武宇都宮線が開通し江曾島の西部を通るようになり、戦時中の昭和18年（1943）には中島飛行機（現：SUBARU）宇都宮製作所が北部に設立されて以降、人口が急増した。昭和29年（1954）には横川村は宇都宮市と合併し、宇都宮市江曾島町となった。かつての純農村は住宅地に様変わりし、畑地が激減すると、陸稲栽培とともにエソジマモチの歴史は地元でも次第に忘れられつつあった。

平成18年（2006）、エソジマモチの記念碑は道路交通量の増加により、地元の方々の尽力で、江曾島の村社である瀧尾（たきお）神社（宇都宮市江曾島4-290-17）境内に移築され、現在に至っている。また平成28年（2016）には、同じく地元の方々の手によって、「明治の功績碑」と並んで「平成の功績碑」（秀農篠崎君功績碑）が建立された。



老農篠崎重五郎功績碑（右が明治の碑、左が平成の碑）

2 エソジマモチ、故郷へ帰る

かつては栃木県の奨励品種として広く栽培されていたエソジマモチだったが、最近までルーツの江曾島町はもちろん、栃木県内外とも全く栽培されておらず、ついには「幻の陸稲品種」となってしまった。

私がエソジマモチについて知ったのは、今から30年以上前、昭和の終わり頃だったと思う。当時、宇都宮大学農学部の学生で、農業史に興味を持っていた私は、全国で広く栽培されている農作物の品種や来歴を網羅した、農民運動家・青木恵一郎の名著『さくもつ紳士録』を愛読していた。その中の「陸稲」項目に「江曾島糯」があり、宇都宮市にもこのような在来品種があるのか、と印象に残っていた。

その後、私は栃木県内の農業高校の教員として勤めながら地域農業史の調査研究を行い、20年前に全国にある農業の科学・歴史・文化等を伝える100施設を紹介した『全国農業博物館・資料館ガイド』を、13年前にイチゴ・カンピョウ・アサなど栃木県を代表する7つの特産農作物の歴史をまとめた『とちぎ農作物はじまり物語』を刊行した。

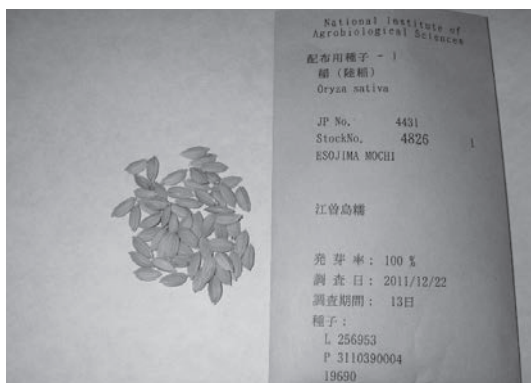
その間私は県南の栃木農業高等学校に勤務していたが、宇都宮市の在来品種エソジマモチの種子（原種）がどうなっているかは、ずっと気になっていた。なぜなら、小著で取り上げたカンピョウやアサにしても、かつては県農作物の主力として、その作物専門に創設された試験場（南河内分場・鹿沼分場）で盛んに試験研究や品種改良が行われていたが、栽培農家数が減少すると対象から外され閉場となり、研究どころか採種すらされなくなった現実を目の当たりにしていたからである。

案の定、宇都宮市瓦谷町の栃木県農業試験場に問い合わせたところ、大正時代から昭和20年代までは陸稲の試験研究が盛んで、エソジマモチも

その頃まで栃木県奨励品種として登録されていたが、現在は栽培しておらず、種籾も全く残っていないとのことだった。もちろん県内外の農家でも全く栽培しておらず、また採種が完全に途絶えてしまった以上、エソジマモチ復活はあきらめざるを得なかった。

ところが思わぬ所から朗報が届いた。平成23年（2011）2月18日、私は民間団体「お米の勉強会」（兵庫県西宮市）主催の研修会に参加し、県内外の農家や消費者の方々と一緒に、茨城県つくば市にある「国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）遺伝資源研究センター（ジーンバンク）」を見学した。その名の通り、日本国内はもとより世界中の遺伝資源を調査・収集し研究利用のために寄与するための国の機関である。遺伝資源は多様性があるからこそ価値があり、世界トップクラスの25万点を超える膨大な種類の穀物や野菜などの種子、栽培種・野生種の植物、家畜の細胞、微生物などありとあらゆるものが、それぞれに適した方法（冷蔵冷凍など）で保存されている。そもそも私が期待したような在来品種を守るための施設ではないが、研究目的であれば部外者でも申請すれば、有償で配布を受けられることを、この時の見学で初めて知った。

そこで私は帰宅後に、当研究所ホームページから膨大な遺伝資源データベースを検索してみると、何と、あきらめかけていたエソジマモチ種子



ジーンバンクで冷蔵保存されていたエソジマモチ種子

がヒットした。「品種名：ESOJIMA MOCHI 品種和名：江曾島糯 原産地：TOCHIGI」の名前で、当研究所に冷蔵保存されていることが分かったのである。

平成26年（2014）春、私は当研究所に配布申請を行い、わずか50粒、2グラムのエソジマモチの種籾を購入した。同年5月にこれを苗箱に播種し、当時私が勤務していた県北の矢板高等学校の農場にて栽培し10月に収穫、採種した。翌27年度も同様に栽培し、種籾を1キロ以上に増やすことができた。

平成28（2016）年春、私は定期異動により宇都宮白楊高等学校に着任し、前任校で少しずつ増やしたエソジマモチの種籾を携えて、故郷の宇都宮市でようやく栽培することが可能になった。

3 白楊高校内で栽培開始

平成28（2016）年4月21日、宇都宮白楊高校農業経営科生徒たちとエソジマモチの種籾を育苗箱に播種し、育った苗を5月12日に本校農場内の圃場1アールに移植した。7月14日に出穂したが、山間地にあった前任校と違い本校農場が都会の中にあるためか、スズメの大群の来襲を受け、充実前の籾のかなりの部分が食害されてしまった。対策として7月29日に鳥除けに水系を張り、8月8日に防鳥網を張った。これも市販の防鳥網では目が粗くてスズメの侵入を防げず、栃木県農業試験場麦類研究室 加藤常夫室長（当時）に相談し、特製の目の細かい網（20mm目合い）を購入して張ることで、ようやく鳥害を防ぐことができた。

9月、残った穂が実りはじめた。10月17日に初めてのエソジマモチの稲刈りを行った。特記すべきは、栽培した農業経営科3年生のみでなく、江曾島町内の農家の方々に来校いただき一緒に作業をしたことである。これは宇都宮市役所 経済部 農林生産流通課 生産振興グループ（当時）

● 「幻の陸稲品種」 エソジマモチ（江曾島糯）復活と地域振興

の藍原紀子さんや泉 朝伸さんが、地元農家さんと本校との仲介の労をとり、実現した。

本校（宇都宮農業高等学校）農業科卒業生で陽南地区まちづくり推進協議会長（当時）の篠崎 實さんをはじめ、『陽南三地区の歴史』編纂の際にエソジマモチ出荷記念写真を提供した旧家の中山佳子さん、数少ない専業農家の坂本喜市さんら数名の地元有力者が全面的に賛同協力してくれたことで、本格的にエソジマモチ栽培復活に取り組む体制が整った。特に坂本喜市さんは、私と同様10年以上前からエソジマモチを栽培したいと思い、種籾を探したが、ついに見つからなかったという。坂本さんには本校で収穫した種籾を提供し、次年度より江曾島町内の坂本さんの圃場でエソジマモチの栽培ができることになった。



昭和20年代のエソジマモチ出荷記念写真（旧国道4号・一里の老農篠崎重五郎功績碑前で撮影）

中山佳子氏提供

かつてこの地で盛んにエソジマモチを栽培していたことを熟知しており、地域の誇りとして復活させたい、という強い思いを共有する仲間たちと宇都宮着任早々に出逢えたことは、私にとって何にも代え難い幸運であり、白楊高校栽培初年度で得られた種籾約5kgに勝る大収穫だった。

4 江曾島町で本格的に栽培復活

平成29（2017）年春からは、エソジマモチ完全復活を目指し、本校農場とあわせて、江曾島町の坂本喜市さんの圃場で約半世紀ぶりに栽培して

もらうことになった。ただこの頃は本校からの種籾の供給が十分でなかったため、圃場での直播ではなく、本校で水稲用の苗箱に種籾を播種しハウス内で育苗した。育苗した苗箱15枚を提供し、坂本さんの圃場10アールに定植した。播種や定植、稲刈の作業には本校農業経営科生徒や宇都宮市農林生産流通課職員も協力し、同年9月には約150kgの玄米が収穫できた。当時、坂本さんはこう語っている（日本農業新聞 2017年9月22日記事）。



多くの江曾島町住民を招いての試食会（自治会長挨拶）

「エソジマモチが、ようやく地元江曾島の地に帰ってきた。今回の稲刈りはその第一歩。点から面へ。地域振興につながる特産品に育てていきたい。」

収穫されたエソジマモチは一部が次年度の種籾として保存されたほかは、近隣の和菓子店「すずらん本舗」と「田中米菓」の協力により、赤飯やあんころ餅、おかき加工され、雷電神社の秋の霊祭奉納に合わせて江曾島東公民館で試食会が行われ、約40名が参加した。

平成30年（2018）は、播種育苗を坂本さん宅



エソジマモチの収穫作業を手伝う宇都宮白楊高校生徒

のハウスで行い、5月25日に地元有志の方々や白楊高校農業経営科生徒により苗を圃場8アールに増やして定植し、9月18日に収穫した。

5 「エソジマおかき」発売

令和元年（2019）は、種籾の確保が十分できたので、より省力的な直播栽培に切り替え、引き続き10アールに作付した。収穫量は240kgとなり、収穫を手伝った横川西小学校児童の給食で赤飯として提供されたほか、上横田町の「鈴雅製菓」の協力でエソジマモチ100%のおかき（横川西小児童により「エソジマおかき」と命名）に加工し、11月6日には中心市街地のオリオンスクエアで本校の農業経営科生徒が販売して、好評を得た。「エソジマおかき」は同月16日にも本校学校祭でも販売し、年内に全量完売した。



オリオンスクエアで「エソジマおかき」販売（右端筆者）

令和2年（2020）にはコロナ禍が席卷し、本校と江曾島町有志との活動は十分に出来なかった。しかし半世紀ぶりに復活したエソジマモチを後世に残すため、坂本喜一さんを会長として「エソジマモチ保存会」を発足した。保存会では地元有志である5名の会員を中心として、坂本会長の圃場で約15アールに拡大して栽培を行い、約360kgを収穫した。収穫した新米100%の「エソジマおかき」は、東原町の「田中米菓」が1700袋を製造し、宇都宮市内外のスーパーオータニで令和3年（2021）2月6日から発売（5枚入り約200円）され、大変好評で間もなく完売した。

エソジマモチ保存会は7月25日に会則を制定した。第1条（会の目的）は以下の通りである。「本会は、宇都宮市江曾島町で育成・栽培された貴重な農業文化遺産である陸稲品種『エソジマモチ（江曾島糯）』とその育成者・篠崎重五郎の功績を後世に残すことで、わたしたちの郷土への愛着と誇りをはぐくみ、郷土文化の発展と市民協働のまちづくりの推進に寄与することを目的とする。」

第2条（会の事業）に活動が網羅されている。

- 「①エソジマモチ育成者・篠崎重五郎の功績と、地元江曾島町でのエソジマモチ栽培の歴史および食文化を、市民や子供たちに広く伝える活動を行う。
- ②陸稲エソジマモチの栽培および収穫を行う。
- ③陸稲の固有品種としての純粋性を保ちつつ、種籾の自家採種を行う。種籾は一定量を保管し、栽培を希望する会員に頒布する。
- ④種籾をのぞく収穫物については、調理および加工、給食用食材として利活用する。
- ⑤これらの事業を、市民および関係機関、学校（横川西小学校・宇都宮白楊高等学校など）と協働して実施し、わたしたちの郷土への誇りをはぐくみ地域振興に寄与することを目指す。」

6 「みや遺産」に認定

令和3年（2021）も引き続きコロナ禍で、本校としての活動は十分にできなかった。しかしその中でもエソジマモチ保存会の会員を中心とした活動は継続して行われ、前年度とほぼ同じ栽培面積と収穫量約360kgが確保できた。

収穫した新米100%の「エソジマおかき」は、前年と同様、東原町の「田中米菓」が製造して2800袋と大幅に増やした。宇都宮市内外のスーパーオータニで令和3年（2021）12月から順次

発売（5枚入り約200円）され、1月中には完売した。

令和4年（2022）2月17日、宇都宮市教育委員会は、地域に親しまれる有形無形の歴史文化資源の継承やその保存活用に取り組む団体を支援する制度「市民遺産」（愛称・みや遺産）として、「伝統作物エソジマモチ（江曾島糯）とその歴史をつなぐ『老農篠崎君功績碑』」ほか3件を新たに認定した。2月22日には市役所において認定証授与式が開催され、エソジマモチ保存会の坂本喜市会長が出席した。



「みや遺産」認定証授与式で記念写真（前列右がエソジマモチ保存会・坂本喜市会長，中央が小堀茂雄・市教育長）

平成28年（2016）の白楊高校での栽培開始から6年、翌年の江曾島町の圃場での本格的な栽培復活から5年での快挙であり、過去からの断絶状態（ゼロ）から、ようやくここまで達することができた。私たちは、今後ともエソジマモチがもっと宇都宮市民に認知され、「地域の宝」「宇都宮市の貴重な地域資源」として、次世代に引き継がれて、地域活性化に資することを、切に願うものである。

ちなみに「農業王国うつのみや」と呼ばれ非常に多くの種類の農作物が作られているが、宇都宮市で生まれた（宇都宮市オリジナルの）農作物品種は、実は農水省G I（地理的表示）を取得した「新里ネギ」と、「エソジマモチ」の2つしかない。

コメ余りの時代に日の目を見なくなった陸稲栽培だが、機械化栽培も可能で、転作や遊休地（畑

地）の有効利用ができ、米菓原料などとして在来品種を活用した商品差別化や地域おこし・6次産業化なども考えられ、宇都宮市の新たな特産品としても期待できる。

総務省家計調査によれば、宇都宮市のせんべいの年間消費量は、全国の県庁所在地と政令市の中では、平成18年（2006）から平成27年（2015）まで常に2位以上だった。栃木県のどの家庭にも「〇〇のかきもち」と書いてある四角い缶がある、というお笑いのネタがあるように、宇都宮市内には有名企業を含め大小の米菓メーカーがあり、代表的な地場産業となっている。このことは宇都宮市とその周辺が全国有数の陸稲産地（陸稲はすべての品種がモチ米で米菓原料となる）であることと無関係ではない。

私は『餃子の街うつのみや』だけでなく、『米菓の街うつのみや』のキャッチフレーズを提唱したい。エソジマモチ保存会は、宇都宮市オリジナルの陸稲品種エソジマモチ栽培を点から面に広げ生産量を増やし、市内に集積する食品産業と、全国トップレベルの宇都宮市農業とが連携することで、食と農を地域に取り戻し、新たな宇都宮の味（テロワール）を生み出していく未来を、夢見ている。

主要参考文献

- 青木恵一郎，1974，『さくもつ紳士録』中央公論社
- 田村吉茂，1981，『日本農書全集 第21巻 農業自得・他』農山漁村文化協会
- 栃木県農業試験場，1995，『栃木県農業試験場100年のあゆみ』栃木県
- 農林水産省大臣官房統計部，2021，『ポケット農林水産統計 令和2年版』農林統計協会
- 橋本智，2002，『全国農業博物館・資料館ガイド』筑波書房
- 橋本智，2009，『とちぎ農作物はじまり物語』随想舎
- 松尾昌彦，2014，『スマート・テロワール 農村消滅論から大転換』学芸出版社
- 明治百年記念栃木県農業祭開催委員会，1968，『栃木県農業先覚者顕彰録』栃木県
- 陽南三地区歴史編さん委員会，2009，『陽南三地区の歴史一陽南・緑が丘・陽光一』宇都宮市南生涯学習センター